河内町の稲穂

（表紙写真提供：河内町）

空と緑と金色の穂平線（すいへいせん）が見えるまち、河内（かわち）町。常陸国風土記（ひたちのくにふどき）には、「流海と鹿の棲む葦原（あしはら）であった」と記されるこの町には、利根川の豊かな水とともに歩んできた歴史があります。

その昔、“暴れん坊の坂東太郎”の異名を持つ利根川の度重なる氾濫により、河内町は何度も苦しめられてきました。しかし、その結果、この地に極上の肥沃な大地が誕生しました。

その後、人々は平らな土地に集落を築きつつ川と共存し、まちは稲作を中心に発展。江戸時代には、河内産の米が江戸の町へと水路で運ばれ、この地域は「江戸の台所」と呼ばれていました。

利根川の護岸工事後、河内町は県内有数の早場米の産地となりました。毎年秋になると、黄金色の田園風景がどこまでも広がります。茨城県の統計によると、河内町の「市町村総面積に占める田の割合」と「人口１人当たりの田の割合」は、県内１位に輝いています。

利根川流域特有の温暖湿潤な気候は、豊かな稲穂を育ててきました。その味は、ねっとりとして甘味が強いと、高い評価を得ています。また、2002年には、皇室にも献上され、大きな注目を浴びました。

新米が美味しいこの季節、河内町が誇る極上の一品をご家族で味わってみてはいかがでしょうか。

◆場　　所：茨城県稲敷郡河内町源清田1183（河内町役場）

◆アクセス：

【 車 】圏央道「稲敷IC」より、国道408号線で約20分

【電車】JR常磐線「佐貫駅」下車後、関東鉄道竜ヶ崎線に乗り換え「竜ヶ崎駅」下車、バス・タクシーで約20分

筑波総研株式会社　研究員　冨山かなえ